

## 寄贈須恵器の紹介

平城宮跡発掘調査部

近頃、当研究所に土器2件の寄贈があった。いずれも須恵器であり、一件は、口縁の3分の2を欠損するが、以下の部位は完存する奈良時代の甕である。もう一件は、出土地点が明らかで伴出遺物も知れる古墳時代の蓋付短頸壺である。貴重な資料であり、ここに紹介し、寄贈者に対し感謝の意を表する次第である。

**須恵器甕** 京都市谷口菊野氏他4名（本庄久光・田中紀代子・本庄繁・田沢糸枝）の方より寄贈を受けたもので、平城宮から出土したと伝える。若干、燻し気味の焼成で灰黒色を呈す。口径27.2cm、高さ49.6cm。倒卵形の体部に外反する口頸部が付く。肩部外面付近は、ロクロケズリを施すが、叩き目を消し去るまでにはいたらない。内面にはナデを加えるが、全面的に当板痕を留める。これとほぼ同型式の甕は、馬寮にある井戸SE6166から出土していて、8世紀末葉の年代が考えられよう。

出土位置図 1:12000

**蓋付短頸壺** 奈良市佐紀東町川辺康雄氏の寄贈で、昭和38年頃、磐之媛陵（ヒシアゲ古墳）の北、字鷲が峯に所在する小山の造成中に出土し（位置図）、川辺氏の父、茂夫氏が業者から譲り受けたものである。また、これとともに、土師器の高杯と甕の把手片、刀と思われる鉄片、簀付円筒埴輪片が採集されており、恐らく木棺直葬の古墳に納められていたものだろう。

蓋は、口径12.2cm、器高5.3cm。中央が僅かに凹むつまみをもち、口縁部が外反し、端面は段をなす。短頸壺は、口径7.6cm、器高13.7cm。ほぼ、まっすぐ立ち上がる口縁部と胴張りの体部からなる。口縁端部は、蓋と同様な作工で、体部下半をロクロケズリ調整する。両者とも粗い長石粒を多量に含む胎土で、灰青色に焼き上がっている。蓋の天井部と縁部の境に突帯がないこと、身の肩部が丸みを有し、器高が高いことから、6世紀前半頃に比定できようか。

須恵器蓋付短頸壺

（巽淳一郎）

須恵器蓋付短頸壺（下）  
伴出土師器高杯（上）1:4

須恵器甕